

わからなかった、というが、わからないときというのは、自覚すらしていないことの方が多いように思う。

要するに、人生を歩んでいく中で、今までいかにわかっていなかったかということにうすうす気づき始めて、その感触は今確信に変わろうとしている。

萌芽の萌芽までさかのぼれば、保育園の劇で役を決めるとき、当たり障りのない適当な役として学者役を志願したのだが、先生からとても似合っていていいだろうという旨の発言をいただいたのであるが、結局あれは何だったのだろうか？

小学生において、日常のいたるところに違和感があった。

最たるものは、集団的な笑い。そこには確実になにか不可視の存在を共有している集団が観察された。

その日常的な不可解に、当時わざわざ考察を向けようとは考えないことくらい理解していただきたい。

しかし考えてもみれば、それはなにか社会が感じている違和感の証なのだろうかときえ、今になっては思ってしまう。

とはいえ、良き友人もちろんいたし、毎日充実していた。いじめられることもなかった。それどころか似たような立ち位置にありながら、ひどくからかわれることに思い悩む友人を見て、どうしていじめられないのかをよく考えていたくらいには余裕があった。というよりか、そういった態度こそが客観的に見ればおかしかった

ということなのか？

最初の発見は小学校の卒業式である。

これまでのことは、振り返ればその兆しだったのかもしれないと考えることだが、当時としては、振り返らなければ察知できないレベルでの違和感でしかない。だが、これは、確信をもって違和感を覚えるまでに至る最初の気付きというわけである。

卒業式で泣いたということはどこにでも見られるごく一般的な現象だ。いや、ごく一般的にみられる現象、として処理してしまう思考がこのとき生まれてしまったのである。あのときは確かに泣いていた。だが同時に普段は粹がっている友人が泣いているのを見てしまった後に泣いた。そこには因果があるかもしれないし、無いかもしれない。しかしそのことが冷静に引つかかってしまった。感受性が強いからよく泣くって、そう言われていたのに、そういう現象として、みんなが泣く、こういうときには泣くものだという夾雑物が侵食し始めたのである。感受性とは何なの？

そのあとの写真撮影や謝恩会では、やけにテンションの高い母親に違和感を覚えながら、小五までは早く帰れていたのに、小六ではそうではないのか、いつ帰れるのだろうかということばかり考えていた。

中学二年生の時の離任式で、部活の恩師が移動になるというのに、周囲の感動的な雰囲気についていくことが出来ず、写真撮影すら乗り気になれない自分についていける機感を覚えるようになった。

中学の卒業式では、あろうことか教頭が開式の言葉を盛大に間違えた。不穏な空気の中、このときもまた、いたって冷静な思考がさらに侵食する隙が生まれてしまったのではないか？

予行練習で卒業式ソングを歌っていた時にこみ上げてきたあの感情も、空気を読もうとする努力の中で理性が感動に酔っているフリをしていただけなのではないかと疑うくらい、思考はついに宙に浮き始めた。この卒業式には、何の感慨もなかった。

高校の数学では、別解を考え付くのが上手かった。別解が出るたびに発表し、生徒や先生と議論を楽しんだ。忌憚ない議論は、それはそれは面白いものであった。

進路について周囲が活発に話すようになった頃、別の違和感が生じ始めた。進路とはどのように決まるのか？進んでいい進路とは何か？社会における意義とは？まったくもって社会貢献というものに惹きつけられたことが無かったのである。そうだ、それこそ祖母を医者に助けられたところを目の当たりにするとか、親の仕事に憧れを持つとか、手頃なエピソードでもあったらよかったかもしれない。

それを皮肉るように、友人も教師も、口々に、進路のためより学問そのもののために学習を行っていて感心だと言いはじめた。そこで初めて、周囲の人間がどれほど周囲の状況(無意識ながらなのかもしれないが)を観察し、自分の好奇心よりも、なにかこう無意識的な義務感のようなものに従って行動しているのだということに気が付いた。それは同時に、どれほどそれが周囲と比べて欠けているか、欠けているか、ということをはっきりと突き付けられたときでもあった。好奇心と創意が立場を失墜させた。

皆、このくらいまで生きてきていれば、立ち位置や社会的に果たさなければならぬことを発見するか、または何かを指すに足るエピソード、そうしたものを、持っているのだ。そういう人生設計用に、出来ているのだ。

そんな中を、周囲で起きていることに気付かず、好奇心と創造欲を頼りに毎日を楽しんできた日常は、最高に無価値であった。

授業において何も表明することのない機械的人間たちと思っていた者たちが、どんなに周りを察知してあるべき生き方を選択しているか、そして褒められるまま、好奇心と創造欲のままに進むことのどれ程勝手に無知で深いものか。無価値だ。一向に無価値だ。楽しさという贅沢に何の意味がある。その無価値さに、いったい誰が許しを与えるというのだろうか。

創造主はいっだって無責任だ。マクロの中に不均衡を創り出しておきながら、不均衡の気持ちを考えたことがない。

親との話の中で印象に残っているものはいくつかあるが大体内容は同じである。

なにか間違いを犯したことが親にバレて、すると口をきいてくれなくなったり、大事な書類にサインをくれなかったり、玄関から出されたりした。大抵泣きついて事なきを得ているから今に至るのだが、その度に次やったら許さないとか言うのが定番になっている。なにか非道なことを行った際には責任をもって心中する心づもりもあるらしい。やはり楽しみに毎日を通している身としては、少なくとも今は親に養ってもらえないというのは非常に困る。となれば、親の言うことは聞かなければならない。かといって、自分がやらかした罪をすべて覚えているわけでもなく、正直何をしたらもうだめで何がぎりぎり許されるのかはあまり正確に把握していない。

親は真理をよく心得た良い親であった。だから自分がいくら大人であろうと間違いを犯すものだとということを

早いうちから教えられた。あるとき手が滑って瓶を強くたたきつけるように置いてしまったのを親が見て、モノに対する八つ当たりか何かだと勘違いしたらしく、咎められたことがあった。当然の権利と思つてそれを弁明したのだが、親は、それは、言い訳だと言った。親だつて間違える。ただ、間違えるとかそういうことは抜きにして、家族という共同体において、最年少者が果たす義務として、養ってもらう身として、親の言うことはやはり聞かねばならない。幼心にそのような理解をした。

だから学校では(前にも言ったかもしれないが)奔放で周りのことを気にする能力のない子供のくせして、親が見ている前では、後で何か文句を付けられやしなやかと妙に緊張して、あの蛮勇はどこに行つたかと言わんばかりに、そのときだけは周りに気を配ることを覚えた。しかしながらもともとそのような才覚などないのである。そればかりは変えることもできない。

端的に幸せな日々である。何の不自由も、一切経験したことは無い。親は特に母親は貯金が上手で、教育に関して何も事欠くことは無かつたどころか、欲しいと言つたものは(当然常識的な限度の範囲だが)なんでも買ひ与えてくれた。子供の不調には敏感で、きつとそういった感情や性質、調子の変化は親の方こそよく心得ているといえる。もちろん悩みには真摯に向き合い、いつだって味方であるのだろう。本人もそう言っている。平たく言えば、非常に愛情の強い、そして良識的で賢明な親であったのである。

そう、その愛情なのだ。親は「ことあるごとくに、「無償の愛」を説いた。もちろんその存在を信じている。存在はするのだ。確かに存在はするのだ。自分が触れていないものがひとりで動くはずはない、そこには何らかの要

因が予測されるように、必ず、「無償の愛」は存在する。そう言っている。そうなのだから、必ず、必ず、存在する。その実態をつかむことはできなくとも、そこには何か途轍もなく大きな力が働いている。絶対に、そこにかがあるのだ。絶対に、絶対に、存在するのだ。

教育を施すのは親だが創造したのは親ではない。社会は楽園で、無限に恵みをもたらしてくれる。しかし創造されてしまったのだ。創造されてしまったのだ。

気付いてしまった。その途端急に恐ろしくてたまらなくなった。これまで生きてきた、見えてきた世界の正体を知ってしまったことではなく、それを知らずに生きてきたこと、急にその事実と対面させられることが、恐怖させるのだ。どうしたらいい。永遠にとは言わないが、なんとなく世界は存続を許してくれるものとはかり思っていたのに。